



読書感想文コンクール特別大賞

こころ

電子情報工学科 一年一組 井上賢治

主人公に語られる先生の過去、先生の友人Kの自殺。そして先生は、Kを自殺に追い込んでしまったという罪悪感から自殺してしまった。この先生の行為に対して、いろいろなことを思った。

テレビを見るとき、乱れている映像は脳が見ないようにしてくれていると聞いたことがある。あるものを自分の都合がよいようにならないものとしてしまうのだろう。これはこころの場合も同じであると思っている。多くの人は自分の罪や嫌なところを見ないようにしてしまうものだろう。しかし、先生は、世の中や周りの人たち、自分のことさえも冷静に見つめることが出来た。そして、先生は自分の罪を認めることが出来てしまった。自分の嫌な面をしっかりと捉えることが出来てしまった。出来てしまったがゆえに、Kの分も生きるという道を取ることが出来ず、自分は自殺すべきだと思ってしまった。僕は、その先生の性格をととても悲しく思った。また、素晴らしく、羨ましくも思った。僕は自分の嫌な面を認知はできていない。正直なところ、認めるのが怖いのだ。僕はそれが出来てしまう先生が本当に素晴らしかったと思った。そして、僕も自分の嫌なところと向き合っていけるようになりたいと思った。

そして、この話の中で重要なKの自殺についてである。まず、Kが自殺した理由から書かせて戴く。本には、Kが自殺した理由としてKの遺書と先生が考えたことが載っていた。Kの遺書には『自分は薄志弱行で行く先の望みがないから自殺する』と書いてあったが、先生は『自分がKも好きだった女性と婚約したのを知ったからだ』と理解した。僕はこのKの自分の未来に見切りをつけ自害するという行為が、浄土真宗で咎められていなかったことがとても悲しい。たしかキリスト教では、自殺は命を与えてくれた神を冒瀆する行為とされていたので自殺はしない。もしKがキリスト教徒であったならKも先生も亡くなることはなく、別の道が開けていたのではないかと悔やまれてならない。

最後に、Kが自殺したときに何を考えていたかである。先生とKの部屋が隣で、それは襖で隔ててあるだけであった。そして、普段は隙間がないように閉めてある襖が、Kが自殺した夜に少しだけ開いていたのである。その『Kはなぜ襖を開けたのか』がとても疑問である。一度開けた襖を閉め忘れたのか。それとも意図的に開けておいたのか。意図的に開けたのであればその意図は何か。先生に最初に見つけてほしかったのか。先生に何かを伝えたくかったのか。僕なりにいくつかのシチュエーションを考えてみた。もしKが先生に何かを相談しようとしていて、先生がすでに寝ていたから相談が出来なかったのであれば、先生に相談することでKが自殺を止めることが出来たなら、こんなに悲しいことはないと思う。また、もしKが先生に最初に見つけてもらうことを望んでいて、その理由が先生に罪悪感を持たせるために襖を開けておいたなら、これは先程とは別の意味でとても悲しい。結局のところ、僕はKではないのでKが何を考えていたかは理解し得ないわけであるが、僕が想像出来る限りいろんな見方をしていきたい。

これは人から聞いた言葉であるが「現在とはいろいろな見方がある。『ただの今としての現在』、『過去の結果としての現在』、『未来の原因となる現在』。そして、『未来の原因となる現在』を大切にすべきだ」と。人は常に進歩している動物である。その足を止めてしまったら、筋肉は衰え、いずれ立つことも出来なくなるだろう。現在しか見えていなかった若かりし頃の先生のように未来への道を間違えたりしないで、道の先に何があるのかをよく見て、最も良い道の選択が出来るようになりたい。

書名 　こころ
著者名 　夏目漱石
出版社 　旺文社